

故稲垣所長、故牛山副所長の志をついで、新たな一歩を

教育研究所 所長 佐伯 胖

本巻は第65期研修員のみなさん8名の論文を中心としています。第65期の研修員は平成23年4月に、長野県教育委員会による研修派遣として、信濃教育会教育研究所に入所され、2年間の研修の成果をまとめました。研修員が入所してまもなく、8月には稲垣忠彦所長が亡くなられ、つづいて12月には牛山榮世副所長が亡くなられました。そして平成24年4月から佐伯が新しく所長として着任し、久保田ひろ子新・副所長のもとで研修を続けることとなりました。そのようなしだいで、研修員のみなさんは精神的にさぞ大きな打撃を受けたことと想像されますが、互いに励まし合い、支え合いながら、着実に研修を重ねて参りました。1年間、研究所で自分のこれまでの実践を徹底的に振り返り、課題を見いだして解決の方向をさぐるという辛抱強い探求を重ねて、2年次には新しい実践現場で文字通りの悪戦苦闘を経験し、ドナルド・ショーンのいう「実践の中での省察 (Reflection-in-Action)」を日々迫られながら、目の前の子どもたちの思いもよらない「想定外」の反応にも必死で向き合って、「あるべき教師」の生き様を貫いていくことは、大変な努力とエネルギーを要することだったことでしょう。

24年4月に、まったく「右も左もわからない」まま所長という立場に置かれ、毎日が戸惑いと不安にかられて、ともかく手探り状態で一年を過ごして参りましたが、研修員のみなさんがどんどん成長され、探求が深まって行かれることには、驚きと感動を禁じ得ませんでした。

一方、世間では、教師の暴力やいじめによる生徒の自殺など、教育現場の荒廃と混乱で教育への不信が高まり、教員の資質や指導力を高めるために、「管理」という名の締め付けも日々増してきているこの頃です。こういう時こそ、一人ひとりの子どもたちに向き合い、寄り添いながら誠実に日々の実践を積み重ねる教師の姿を、世の中に示して、「本当の教育とはこういうものだ」と世間に知らしめていくことが大切になります。研修の「テーマ」についても、今日の教育状況を見据えて見直すべきとの声もあり、次年度の重要な検討課題となっております。

教育研究所の研修について、世の中に知っていただくべく、インターネットのホームページも開設され、研修員たちの生き生きとした研修状況が数々の写真とともに紹介されています。みささまのご意見や改善のヒントなど、どしどしお寄せいただければ幸いです。

(2013年3月31日)